チャプレンだより 29

2026 年 10 月号

チャプレン　大畑　喜道

今月の聖句

隣人を自分のように愛しなさい

マタイによる福音書 22 章 39 節

先月は神は愛ですということを学びました。神がまず私たちを大切に思って大事にしてくれている。愛してくださっている。それはわたしたちが何かをしたから、そのご褒美として愛してあげましょうと言うことではありません。無条件に大切にしてくださっている。しかしその現実を人間はなかなか理解することができません。私たちの世界は因果応報だと考える人が多いのです。何かをしたら何かが起る。私たちは罪を犯したので、その結果として罰が、苦悩が与えられる。しかしそうではないのです。だから私たちは善行を積んで幸福を手に入れようと頑張ります。私たちは神に無条件に愛されているから嬉しくて嬉しくて仕方がない。それに応えることとして神が望むように愛していこう。親は我が子をいつもぎゅっと抱きしめます。それは神の愛に似ています。どんなに悪くても最終的には大事な我が子だと抱きしめます。子どもを持った方々はその感覚は理解しやすいと思います。

And was moved to pity at the sight.
He approached him and dressed his wounds

律法の専門家が尋ねます。「一番大事な掟は何ですか。」何をしたら救われますかと言うことです。イエスは答えます。「神を愛し、隣人を愛しなさい。」すると律法の専門が問い返します。「隣人をとは誰の事ですか。」ルカの福音書にはとても有名な善いサマリア人の譬えというのが残っています。日頃仲違いしていたユダヤ人とサマリア人。あるユダヤ人が旅の途中で強盗に襲われて半死半生にします。一番最初に通りかかったのは祭司です。しかし死んだ人に触れるとこれからの仕事に差し障ると、見て見ぬ振りをして去って行きます。次に来た人も煩わしい事に巻き込まれたくないと、祭司と同じように見捨てます。そこにやってきたのはサマリア人です。日頃ユダヤ人には嘲笑されて虐められていた。虐めた当人ではないが、良い機

会だから日頃の鬱憤を晴らしてやる。そんな思いを持っても理解できるのですが、彼は近寄って薬を塗って応急処置をして、ロバに乗せて町に連れ帰り、宿で休ませます。これだけでは終わりませんでした。彼はまだ立つことのできないユダヤ人をおいていかなければなりません。宿屋の主人に幾ばくかの金を渡して介護を頼みます。そしてもしも不足があれば帰りに支払いますと。イエスはこの譬えを語った後で、誰がこの旅人の隣人となったかと聞きます。自分の仲間、自分の気にいった人が隣人ではない。憎しみを抱き、悲しい思いをさせた人も隣人の一人だ。何かの条件があるわけではなく、自分の目の前にいる人はみな隣人だ。その隣人を大切にして優しくしていく。無条件にしなさい。簡単そうで難しい課題です。誰がそんな事ができるのだろうか。どうせ助けても感謝もされないだろう。いつも虐めているわたしを助けたのは何故だ、蔑むつもりかと言われるかも知れない。神が無条件で愛したように、出会う人に無条件で大切にしていく。こどもたちの言葉で言えば、誰でもめっちゃ大切に、優しくしなさいと言うことです。

昨今は人を見たら危険な人だと思って声をかけられても黙って、すぐに逃げなさいと教えています。確かに異常な行動をする人がいることも事実です。注意すべき時は注意しなければなりません。しかし誰にも無関心で、自分だけで生きている社会なんて何と空しい世界なのでしょうか。ギスギスして人を信じられない。隣人との関係を避けて通ろうとする。倒れている人が家族だったら必ず近づくでしょう。あの人は鬼のような姑だから見捨てようと言う人はいるかも知れませんが、そもそもそう思う人は家族ではありません。

先月考えた神は愛ですという事を思い出して貰いたいのです。神はすべての人を大切に優しくしてくださった。愛してくださった。私たちは神に愛された仲間同士です。家族なんだ。だから幼稚園に通園しているこどもたちも保護者も、保育者もみんな一つの家族です。嬉しいことが起こったら一緒に喜び、悲しいことが起こったら慰め、辛いときは一緒に寄り添う。聖公会八王子幼稚園が素敵な家族として互いに愛し合えるようになりたいと願っています。幼稚園のこどもたちはとても素敵です。誰かが転ぶと大丈夫と言ってみんなすぐに駆けつけ、泣いているお友達に寄り添う。大人になってもその心が無くなりませんように。彼らの優しさを大きく育てていくのはわたしたちの使命だなとつくづく思います。

神を愛し、隣人を愛しなさい。難しくできないと諦めることなく、日々の生活の中で本当に小さな事でも良い、何かをしていくうちに私たちは成長させられていくことでしょう。